



Title	関税同盟理論の一考察
Author(s)	梅津, 和郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1962, 11, p. 99-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関税同盟理論の一考察

梅 津 和 郎

A Note on the Theory of the Customs Union

Kazuro Umezu

Summary

This paper deals with the impact of the customs union on the rest of the world.

Professor J. Viner introduced the notion of trade-creating and trade-diverting effects to explain it. But he is refuted by Professor J. Meade with the notion of trade-expansion effects.

Professor Meade's criticism is interpreted from the author's own point of view.

1. 貿易創出効果および転換効果

相互間には貿易障壁を除去するけれども第三国にたいしては共通の関税障壁を設定する関税同盟の形成は、一定の世界資源のより効率的な利用を導くのであろうか。近代理論におけるこのような問題の提示にたいして直截な解答を与えたのは、バイナー教授の貿易創出効果(trade-creating effects)および貿易転換効果(trade-diverting effects)の概念であった。

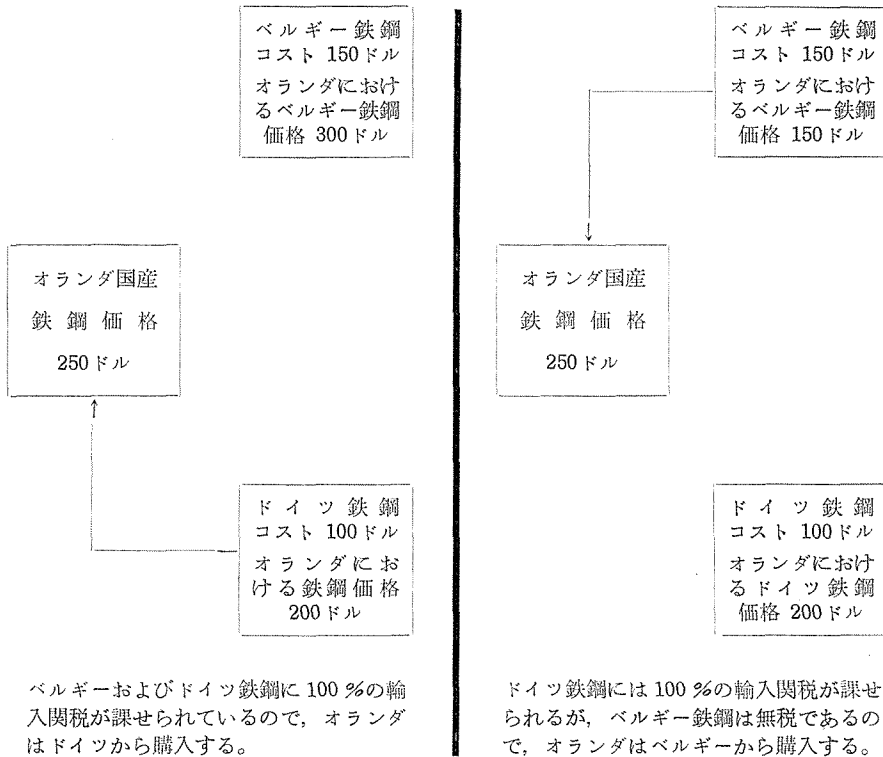
ミード教授の説明によってまずその内容を検討するならば、つぎのとおりである。¹⁾ いまオランダ、ベルギーの二国を想定し、両国が資源の安定・完全雇用、相互の取引における貿易と支払いの自由、さらに国際収支の均衡を維持すると仮定する。

図1に示されているように、関税同盟の形成以前において、オランダがあらゆる供給先からの鉄鋼輸入に100%の従価税を課したと仮定しよう。さらに、1トンの鉄鋼を生産するに要するコストがドイツにおいては100ドル、ベルギーでは150ドル、オランダにおいて250ドルであるとする。そこで、関税同盟形成以前における輸入関税込み鉄鋼価格は、オランダ市場では、ドイツ産鉄鋼は200ドル、ベルギー産鉄鋼は300ドル、最後にオランダ産鉄鋼は無税であるから250ドルとなる(図1左側参照)。ドイツの鉄鋼は、コストにおいても市場価格においても最低であり、オランダの需要者によって購入されるのである。

さてつぎに、オランダ、ベルギー両国間で関税同盟が形成されたと仮定しよう。その結果、ベ

ルギー鉄鋼はオランダ市場で無税となり、価格は300ドルから150ドルに下落するであろう。関税同盟形成以前とことなって、ベルギー鉄鋼はもっとも安価となる。オランダの需要者は、コストではもっとも安価であるけれども輸入関税のため市場価格が相対的に高くなるドイツ鉄鋼よりベルギー鉄鋼に輸入を転換することとなる。(図1 右側参照)。したがって、低コストのドイツ鉄鋼業から高コストのベルギー鉄鋼業への非経済的な生産転換がおこなわれるのである。

図1 関税同盟の貿易転換効果



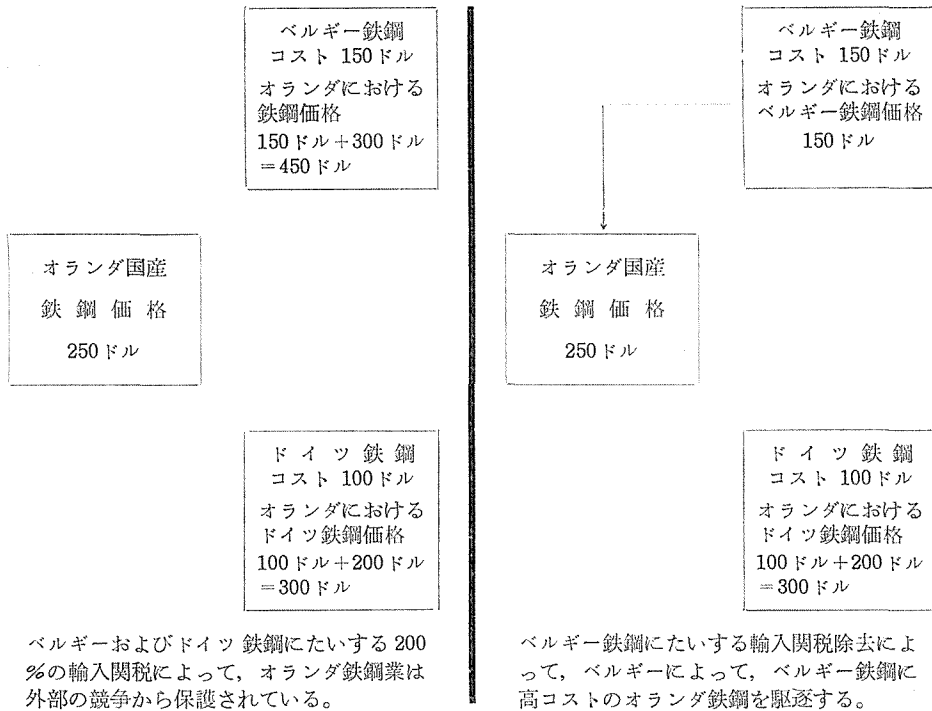
【注】 J. E. Meade, Op. Cit., p. 30 より作成

以上がバイナー教授による貿易転換効果の内容であった。関税同盟によって外部世界の能率的な産業が不利となり、その結果、他の事情にして等しい限り世界の産出高は減少することゝなつて生活水準の低下をある地域においてもたらずに違いない。バイナー教授はかゝる意味において、貿易転換のケースが非経済的であると規定している。

関税同盟の形成によって、オランダの需要が低コストのドイツ鉄鋼から高コストのベルギー鉄鋼に転換されるケースをみたのであった。つぎに、同じく関税同盟が資源のより効率的な利用を実現する場合を考えてみることにしよう。

貿易転換効果の場合と同じように、ドイツ鉄鋼コストはトン当り100ドル、ベルギーは150ドル、オランダは250ドルと仮定する。オランダがドイツおよびベルギー鉄鋼にたいして200%の輸入関

図2 関税同盟の貿易創出効果



【注】 J. E. Meade, Op. Cit., p. 33 より作成

税を課するならば、オランダ市場における両国鉄鋼の輸入価格はそれぞれ300ドルと450ドルとなる。(図2左側参照) 関税同盟の形成以前においてオランダは自国産の鉄鋼を使用し、その輸入に依存しない。そこで関税同盟が設立され、ベルギーにたいする輸入関税が撤廃されるならば、オランダ市場におけるベルギー鉄鋼価格はそのコストまで下落するであろう。(図2右側参照) オランダの需要者は自国産の鉄鋼(250ドル)からベルギー鉄鋼(150ドル)を利用するようになるであろう。このことは、低コストのベルギー鉄鋼業のより効率的な拡大を意味するものである。関税同盟の形成が新しい貿易の創出をもたらし、そして資源をより経済的な生産のパターンに移転せしめるのである。バイナー教授は、これを貿易創出効果(trade-creating effects)とよんだ。しかしこの場合、ベルギーよりも低コストのドイツ鉄鋼業が犠牲となっていることに注意しておきたい。この点に関してバイナー教授はつぎのように言っている。「貿易創出効果が優越している場合には、少なくとも加盟国の一国は利益を得る。そして世界全体にとっても有利となる。しかし外部世界は少なくとも短期的には損失を受けることとなるが、関税同盟地域の経済的繁栄が拡大する結果とのみ、長期的には利益を受けるであろう」²⁾、と。

しかしながら、外部世界が長期的には利益をこうむる場合を説明する論理の展開がバイナー教授には欠けているのである。

2. 貿易拡大効果

関税同盟の経済的効果についてバイナー教授は、貿易創出効果および転換効果の概念を提示したが、これにたいするミード教授の批判の積極面は貿易拡大効果（trade-expansion effects）の概念をうちだした点に求められよう。この点に焦点をしばって、問題を明らかにしていくことにしたい。³⁾

まずミード教授は、バイナー教授の分析が貿易創出効果から生ずる経済的利益を貿易転換効果による経済的損失に比較してその差をいかに測定するかの方法を示していないと批判する。貿易転換効果の設例にしたがって、ミード教授の論理をたどっていくならば、つぎのとおりである。

関税同盟が形成された結果、オランダは、従来どおり輸入関税が課せられる低コストのドイツ鉄鋼の代りに、輸入関税が撤廃された高コストのベルギー鉄鋼を輸入すると仮定しよう。この場合、すでに述べたように低コストから高コストの供給源に貿易を転換することから経済的損失が生ずる。しかし同時に、ベルギーは、関税同盟形成以前においては自国で生産していたチーズを輸入関税撤廃の結果、オランダから輸入するようになったと仮定しよう。この貿易創出にもとづいてコストの節約と経済的利益とが生じてくる。かくして鉄鋼における損失とチーズにおける利益とが同時に生じてくる。この場合、コストがより高められたことにもとづく貿易転換総額とコストがより低められたことにもとづく貿易創出総額とを単純に比較してはならないとミード教授は言う。たとえば、もし1億ドルの鉄鋼貿易が低コストのドイツから高コストのベルギーに転換され、そして僅かに3千万ドルのチーズ貿易が低コストのベルギーとの間で創出されたとするならば、関税同盟は低コストから高コストの供給地域へ7千万ドルの純貿易転換を生ずることになるだろうか。もちろん、ミード教授によれば、それは正当な結論ではない。

ミード教授は、貿易転換または貿易創出を生じた場合に、それによってコストがどのような影響を受けるかを考慮しなければならんと言う。貿易転換のケースにおいて、ベルギー鉄鋼コストはドイツ鉄鋼にくらべて50%高いと仮定されていた。しかしながら、チーズ生産においてベルギーのコストは、オランダのコストより200%高いと仮定しよう。この場合、鉄鋼生産の附加費用において5千万ドル（1億ドルの50%）の損失が生ずるが、チーズ生産においては6千万ドル（3千万ドルの200%）の費用低減にもとづく節約がおこなわれることになる。

以上のように、貿易創出額は貿易転換額よりも少いけれども、コストの面においては純節約が生ずるのである。

つぎにミード教授は、バイナー教授の無視した需要弾力性を議論のなかに導入する。貿易転換のケースにおいて、オランダ市場の鉄鋼価格は関税同盟の形成以前ではトン当り200ドル（ドイツ鉄鋼コスト100ドルプラス100%の従価税）であった。同盟形成以後では150ドルに減じた。オ

ランダの鉄鋼需要は非常に弾力的であり、オランダ市場における鉄鋼価格下落の結果として、鉄鋼需要が100万トンから300万トンに増加したとする。そこで関税同盟形成以前において、オランダはトン当たり100ドルのドイツ鉄鋼を100万トン輸入し、同盟形成以後においてトン当たり150ドルのベルギー鉄鋼を300万トン輸入することになる。低コストのドイツから高コストのベルギーに転換される最初の100万トンの鉄鋼については1トンにつき50ドル、総額5千万ドルの損失が生ずる。価格下落による需要増加にともなって附加的な200万トンの鉄鋼がベルギーで生産されオランダに輸出されているのであるが、この追加分についてミード教授は効用分析を適用するのである。

関税同盟が形成されてベルギー鉄鋼に課せられる100%の輸入税が撤廃されオランダの輸入する鉄鋼価格が下落した結果、需要増加が生じ200万トンのベルギー鉄鋼が追加輸入される。そのコストはトン当たり150ドル、総額は3億ドルである。さて関税同盟の形成以前において、鉄鋼価格はオランダ市場でトン当たり200ドルであった。関税同盟形成の結果、オランダ市場における鉄鋼価格は下落する。その低落によって、オランダの消費者はより多くのベルギー鉄鋼を購入する。限界効用の作用によって、鉄鋼追加輸入分の価値はおそらく下落するであろう。そして究極的にオランダ消費者は、ベルギー鉄鋼追加分をトン当たり150ドルで購入することになる。したがって、それは4億ドル（初期の最高限界価格トン当たり200ドルで200万トン）と3億ドル（最終の最低限界価格トン当たり150ドルで200万トン）とのあいだにある価額が鉄鋼追加輸入量のそれとなる。ミード教授は、その中間値をとって、200万トンの鉄鋼販売額は3億5千万ドルと仮定している。ところでオランダが需要増加の結果、追加輸入する200万トンの鉄鋼コストは3億ドルであった。したがって、ベルギー鉄鋼にたいする輸入関係が撤廃されることによってオランダの鉄鋼消費が拡大し、生産者のコストにたいして消費者購入額が5千万ドル超過する純経済的利益が生ずる。ミード教授はこの利益を貿易拡大効果とよんでいる。かくしてそれは、ドイツの低コスト生産業者からベルギーの高コスト生産業者へ100万トンの鉄鋼生産が転換したのであった。

以上ミード教授の議論にしたがいながら貿易転換のケースにもとづいて貿易拡大効果から生ずる利益を考察したのであった。貿易創出のケースにおいても同一の効果が生ずる。ミード教授は、つぎのように説明している。

貿易創出のケースにおいて、オランダの鉄鋼輸入関税は200%であった。トン当たりコスト100ドルのドイツ鉄鋼はオランダ市場において300ドル、そしてコスト150ドルのベルギー鉄鋼はオランダ市場において450ドルの価格となる。他方オランダ市場において450ドルの価格となる。他方オランダ鉄鋼コストはトン当たり250ドルであった。関税同盟が形成されてベルギー鉄鋼にたいするオランダの輸入関税が撤廃されると、オランダ市場における鉄鋼価格は250ドル（オランダ鉄鋼

コストは150ドル（ベルギー鉄鋼コスト）に下落する。その結果、トン当たり100ドルの節約が生ずる。しかし、その節約につきるものではない。オランダの消費者は、鉄鋼価格が250ドルから150ドルに下落したのでより多くの鉄鋼を輸入する。ベルギー鉄鋼コスト150ドルと、以前の購入価格250ドルとを両極としてその限界内で消費者価格が決定される。貿易転換のケースと同じように、最低限界価格との差違と追加輸入量の規模とが、貿易拡大から生ずる利益である。

ミード教授がバイナー教授にたいする積極的な批判としてうちだした貿易拡大効果の内容は、以上のごとくであった。この貿易拡大効果の利益は、バイナー教授によって看過されている。しかも、ミード教授によれば、その利益はあらゆる場合においてバイナー教授が認めるよりも一層関税同盟を有利に導くのである。

3. 議論の要約とその批判

以上においてわれわれは、関税同盟に関するバイナー教授とミード教授の所説を検討してきた。

ミード教授が正しく指摘しているように、⁴⁾ 関税同盟の貿易転換効果と貿易創出効果との相違は、後者においてはオランダ輸入関税が相対的に高く設定されている点にある。さらに、バイナー教授は自由貿易論の立場から、関税同盟の形成によって域内関税が撤廃される結果、国内産業が犠牲にされて輸入貿易が新しく創出されるケースを貿易創出効果とよんだ。なるほど関税同盟の形成は関税同盟の形成は関税障壁を除去することによって、能率のすぐれた産業部門に特化がおこなわれ資源の効率的な使用をもたらす。しかしその効果のみをもって利益と断ずるわけにはいかない。関税同盟の形成によって国民経済が解消しえない以上、われわれは国内産業にあたえる損失を考慮に入れなければならない。この点は、自由貿易という現実と遊離した理想像から関税同盟問題を把握しようとしたバイナー教授の理解し難い論理であった。

ミード教授は、バイナー教授にたいする積極的な批判として貿易拡大効果の概念をうちだした。すなわち、かれによればバイナー教授の展開した貿易転換のケースにおいてすら需要の増加による貿易拡大効果は、その損失を相殺しうるのである。ただしミード教授が限界効用にもとづいて貿易拡大効果を展開している点に注意したい。主観的な効用を基礎においた貿易拡大効果は、刻々変動する偶然的なものでしかありえない。さらには、客観的な価格現象を解明する基礎とはなりえないのである。

われわれは、近代経済理論においてつねに看過されている生産関係を基礎にすえて貿易拡大効果の正しい位置づけをおこなわねばならない。

ヒルファアデングは、金融資本の発展にとっての経済領域の意義をつぎのように述べている。

「一方では、保護関税制度の一般化が世界市場をますます個々の国別的な経済領域に分裂させようとするが、金融資本への発展は、経済領域の大きさの意義を高める。経済領域の大きさは、

資本主義生産の発展のために、いっとも大きな意義をもっていた。経済領域が大きくて、人口が稠密であればあるだけ、競争の単位は、いよいよ大きくなることができ、したがって生産費はいよいよすくなく、経営内部における特殊化も、また、いよいよ盛んになることができるのであって、このこともまた、生産費の低下を意味するものである。経済領域が大きければ大きいだけ、ますます諸産業の立地は、もっとも有利な自然条件の存在し労働の生産性のもっとも大きな場所へうつることができる。その領域がひろければ、それだけますます多種多様となり、生産諸部門がたがいにより補充されて、外からの輸入のための輸送費が節減される望みがいよいよ大きい。需要の動きや自然的災害やによる生産の攪乱は、大きな領域では、たやすく埋め合わされる。』⁵⁾

このような金融資本の経済領域拡張への衝動は、戦後の資本主義世市場の外延的狭隘化、市場問題の激化によっていっそう強くなっていると言える。⁶⁾ 西欧本国市場の拡張を第一の目標としている現在の経済統合が、関税障壁の撤廃によって工業国相互間の分業を促進し、その限りにおいて所得を高め需要を増大していくことは疑う余地がない。ミード教授の貿易拡大効果は十分に現実的根拠をもった論理であると言える。

しかしながら、関税同盟の形成は貿易拡大効果のもたらす利益にのみつきるものではない。すでに一国市場の枠をこえて発展した金融資本は、まずできるだけ大きな経済領域を確立し、保護関税障壁によってこの経済領域を外国の競争から遮断する。⁷⁾ そして、「これによってこの経済領域を国民的＝独占的＝企業結合の擷取領域とする」⁸⁾ ののである。

われわれは、関税同盟の成立が新たな規模で資本主義の矛盾を拡大再生産することを忘れてはならない。しかもこのことは、バイナー教授とミード教授の明らかにしえない側面であった。

- 1) J. E. Meade, The Theory of Customs Union. 1955, p.p. 29—33.
- 2) J. Viner, The Customs Union Issue. 1950, p. 48
- 3) J. E. Meade, Op. Cit., p.p. 34—41.
- 4) J. E. Meade, Op. Cit., p. 32
- 5) ヒルファアーディング、林要訳「金融資本論」(大月書店版) p. 505
- 6) 野村昭夫「現代資本主義と経済統合」、1960年, p. 117
- 7) 「金融資本論」(同訳版) p. 531
- 8) 同上, p. 531.

関税同盟理論主要文献*

- | | |
|---------|---|
| Meade, | The Theory of Customs Unions. 1955 |
| Meade, | Trade and Welfare, 1955, Part IV. |
| Viner. | The Customs Union Issue, 1950 |
| Lipsey, | The theory of Customs Unions : Trade Diversion and Welfare, Economica. Feb. 1957. |

Makower & Morton, A Contribution towards the Theory of the Customs Unions,
Economic Journal, March 1953.

*Seminar in International Economics, Topics and reading lists, 1960 - 61 by Sir Roy Harrod
and Sir Donald MacDougall.

(昭和35年 3 月脱稿, 文献目録, 昭和36年10月追加)